

思索の人

福本邦雄

ひとつの情景が眼前に彷彿とする。

大蔵省に大平蔵相を訪ねたときのことである。大臣室に通されると、広い室内はシーンと静まりかえり、ソファに寄って、大臣がひとり黙然と本を読んでおられた。何をお読みなのかと手許を窺いみた。国際通貨制度を歴史的に考察した、ガルブレイスの大著『マネー』であつた。

当時、政局は挙党協の三木おろしで騒然としていた。その渦中の人物が、悠然とひとり読書している姿を眼のあたりにして、さすがと思つた。「このお忙しい時期に読書ですか」と、感じ入って話しかけた私に、「三木さんを先頭にみんながマラソンをやっているところだよ。くつついて走ってみたって仕様がなないじゃないか。こういうときは静かに本でも読んでいるに限るよ」と、ぼつくり答えて、呵々大笑された。

大平さんは稀にみる読書人であつた。宴席や私邸でも、たびたび書物のことが話題にのぼつた。大平さんの読書ぶりは、古今東西にわたつて広く、深く、衆人に抜きんでていたと確信している。

ニュージャーナリズムの旗手、ハルバースタムの『ベスト・アンド・ブライテスト』なども、私よりはるか以前に読んでおられた。また東大の木村尚三郎教授をお呼びした席でのこと。同氏が訳された歴史書の献呈を受けた。ところが大平さんは、すでにそのオリジナルを読んでおられて、木村教授をして驚嘆せしめたこともある。

こうして読まれた書物は、次々に郷里の観音寺市へ送られ、大平記念文庫に収蔵されている。亡くなられた直

後に、そこを訪れる機会があった。

大きな部屋の周囲の壁面が、床から天井まで、びっしりと政治、経済、歴史などの書物によって埋めつくされていた。これら大量の書物のすべてに眼を晒された、在りし日の大平さんの生き方が偲ばれ、涙を誘われた。

この人にして、さすがあの四十日抗争の前後には、政務多忙と心労のため、読書が進まないと嘆かれていたことが思い出される。

当時、私にしみじみとこう述懐しておられた。「なあ君、総理などという職は長くやるものじゃないね。国家の舵をとるといつても、思いがけないことが次々と起こってくるから、神様でも難しいよ。夜中にハッと眼が覚めて、自分の双肩にかかっている責任の重さに、背筋がゾッとして眠れなくなることが多いんだよ。引退したら、いつさい政治には口をさし挟まないで、好きなゴルフを楽しんだり、ゆっくり読書にでも浸りたいものだね」その茫洋とした風貌の奥に、魂の深淵を覗きみたような気がした。

明末の碩学、呂新吾のいう「深沈厚重の人」、この言葉が大平さんにはぴたりだった。読書によって思想を涵養し、その原理原則に従って自らをきびしく律し、現実にあたっていく政治家であった。この点に、他のいろいろなタイプの政治屋と画然と異なる、大平さんの精神の高さを見るのである。

大平さんを想うとき、哲人皇帝マルクス・アウレリウスに共通するものを、いつも感じさせられる。

ギボンの『ローマ帝国衰亡史』に、アウレリウス帝は、政務のかたわら好んで学者たちの進講に耳を傾け、つねに瞑想思索を心がけ、騒然たる戦陣の合間に『瞑想録』を書き綴ったと記されている。

どうぞ総理、天上でゆっくりと読書をお楽しみ下さい。

(フジ・アート社長)